









80th ANNIVERSARY

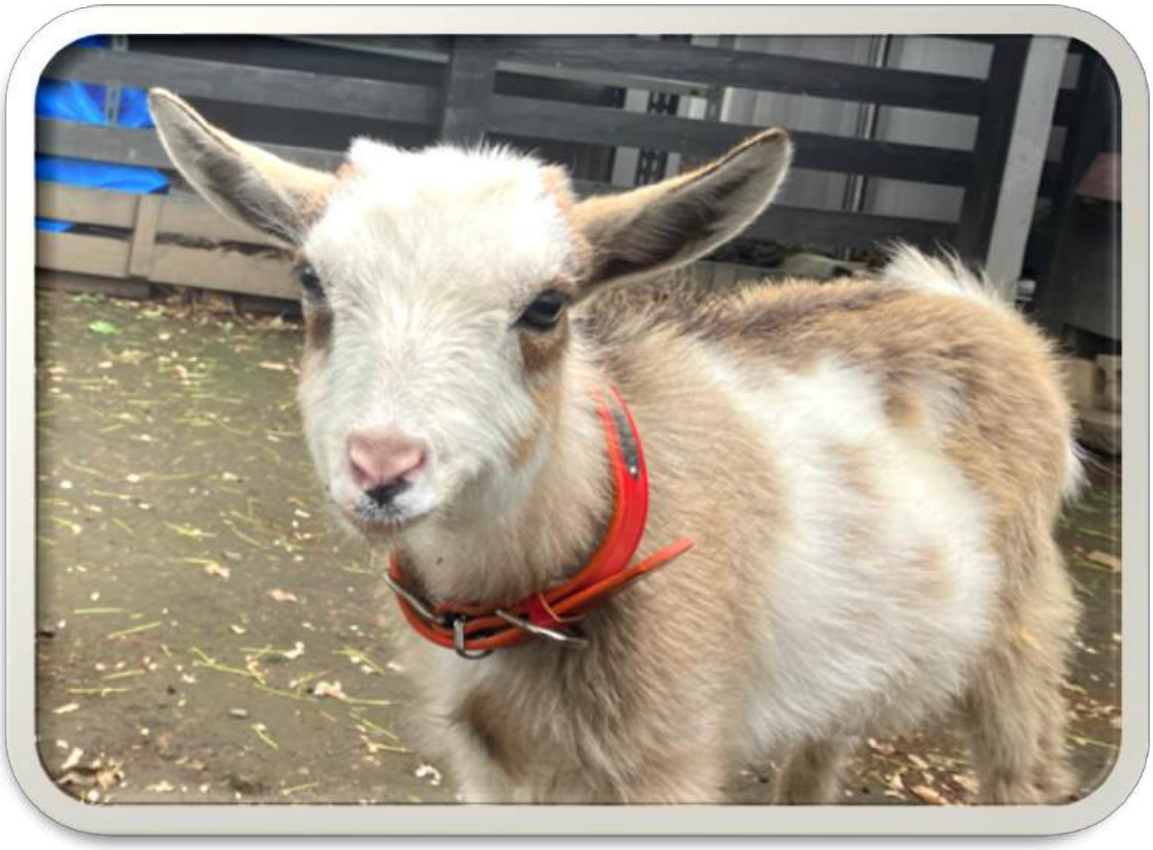
社会福祉法人 大村子供の家

Empathy

大村子供の家 記念誌

80年の歩みを振り返り、
これからも地域とともに、
子どもたちの笑顔あふれる未来へ。

法人概要



子供の家にて飼育中のヤギ「めい」

社会福祉法人　大村子供の家

【理事長】

松本厚生

【運営事業】

児童養護施設　大村子供の家

県央児童家庭支援センター　Rapport（ラポール）

小規模保育園　キッズホーム

認定こども園　キッズランド

放課後児童クラブ　b & g おおむら

高学年放課後児童クラブ　b & g プラス

放課後等デイサービス　nico ステップ

【電話番号】

0957-55-8319

【住所】

〒856-0811　長崎県大村市原口町 591 番地 2

軍都・大村から、復興のまちへ

大村市は、戦時中「軍都」としての一面を持っていた。

大村扇状地には、第 21 海軍航空蔽をはじめとする多くの軍事施設が設置され、軍の宿舎や住宅、疎開工場まで含めた軍用地の面積は、扇状地の半分を超えていたとも言われている。

終戦後、それらの施設は農地や学校、病院などへと転用され、戦後復興を支える存在となった。

そして、その戦後の混乱の中で生まれた場所の一つが、大村子供の家であった。

1946 年 9 月初代理事長・坂田眞瑛は、満州などから浦頭港へ引き揚げてきた孤児たちを、旧日本軍の建物で養護した。それが、大村子供の家の始まりである。

戦後の大村における児童養護の一端を担いながら、80 年の歩みを重ねてきた大村子供の家。

創設者の坂田眞瑛は、なぜ孤児たちを受け入れたのか。その根底には、どのような想いがあったのか。

80 年という節目にあたり、本誌では大村子供の家の歴史と、その歩みを支えた人々の想いを辿っていく。

第１章　満州からの引揚

①新天地を目指して

1932(昭和 7)年、日本は中国東北部に満州国を建国しました。
当時の日本では農村の困窮が深刻な問題となっており、その対策として満州への移民が進められました。
また、食糧増産や資源確保に加え、満州国の支配や防衛を担う目的もありました。
こうした国家政策のもと、多くの人々が新天地を求めて満州へ渡りました。農業移民として送り出された「満豪開拓団」は終戦までに約 27 万人にのぼり、多くの家族が満州で暮らし始めました。



満州の弥栄村の開拓団



ネギ畑の除草をする開拓団の夫婦

②突然の侵攻

しかし、その生活は 1945（昭和 20）年 8 月 9 日に大きく変わりました。ソビエト連邦が対日参戦し、満州へ侵攻したのです。
突然の戦況悪化により、日本居留民や開拓団は避難を余儀なくされました。混乱した交通網の中、多くの人々が徒歩や列車で移動を続け、厳しい逃避行を強いられました。家族が離れ離れになる事も少なくなく、飢えや病気、戦乱によって命を落とす人もいました。

満州に渡った約 27 万人の開拓団員のうち、およそ 8 万人が亡くなったとされています。



満州に侵入し奉天に進むソ連軍

③故郷を失った子ども達

生き延びた人々は日本への帰国を目指し、博多港や佐世保市の浦頭港などへ引き揚げていきました。しかし、帰国後も混乱は続いていました。戦争の中で家族を失った子ども達や、自らの身元を十分に伝えられない子ども達が数多く存在したのです。
揚孤児たちを受け入れた施設の一つでした。

なお、このような引揚の悲劇は満州だけでなく、朝鮮半島や中国本土、樺太など各地でも発生しています。終戦によって故郷や家族とのつながりを失った人々の歴史は、戦後日本を語る上で欠かす事の出来ない記憶です。



神奈川県久里浜に上陸した引揚者

写真出典：文殊社



浦頭港	**1.391.646 人**
博多港	1.392.429 人
舞鶴港	664.531 人
仙崎港	413.961 人

～あの頃を振り返って～



引馬（安藤）孝子

1936 年生まれ　取材時 89 歳

1946 年（昭和 21 年）から 1950 年（昭和 25 年）まで 4 年間大村子供の家に入所。また 1956 年（昭和 31 年）から 1961 年（昭和 36 年）には大村子供の家の事務職員として勤める。

取材者：松本幸治、加藤葉子、髙野知成

2026 年 3 月 3 日　引馬先生宅

○満州からの引揚と子供の家の思い出

戦争中は満州の大連で生活していた。満州での生活は比較的豊かで、父の勤務先に母と兄弟で弁当を届けに行った事を覚えている。両親の仲は良く、普通の家庭だった。

しかし、父は結核を患い、母が一人で看病することになった。やがて両親とも終戦前に結核で亡くなった。終戦後も 1 年以上満州で生活をし、その間は母親の友人の内田さんが面倒を見てくれた。のちに親族ではない事がわかり、そのありがたさを改めて感じたという。

満州からの引揚の際は、運よく病院船に乗る事が出来た。舞鶴で内田さんと分かれ、兄弟と浦頭港で下船した。南風埼駅から電車に乗り、大村子供の家へ。5 年ほど生活をする事になる。

「満開の桜並木がとてもきれいだった。これから始まる新たな生活を想いわくわくした。」と当時を振り返る。



当時の桜並木　現在は若木になっている

子供の家では本館の 2 階で女の子、1 階で男の子が生活をしていた。先生方はしっかり見守っており、男女の行き来にも気を配っていたが、「そんなことをする男の子はいなかったと思う。」と話す。

子ども達は野球をしたり、海に貝を取りに行ったりして遊んでいた。「泳ぎが得意な子は箕島（現長崎空港）まで泳いでいた。」女の子はゴム飛びや縄跳び。ドッジボールなどをして過ごした。



当時の其島と旧大村空港

当時はララ物資の支援もあり、食べ物や衣服に困る事はなかった。鮭の焼き魚と白いご飯が印象に残っている。「どんなに遅く帰っても、ご飯を用意して待っていてくれた。」と語る。

中学 2 年の時に岡山に引き取られ、姉弟 3 人が父方の祖父母の元へ行った。良い家族に恵まれたが、子供の家を離れる時は寂しかったという。

岡山では経理学校に進学した。当時は女性が高校へ進学することは少なく、専門学校に進む人が多かった。

○子供の家に再就職

20 歳を迎えるころ、和田先生から声を掛けられ、大村子供の家に戻り事務職員として働き始めた。事務のほか、調理や入浴の手伝い、夜勤なども行った。

当時の子供の家には慰問も多く、自衛隊や地域の人々が訪れていた。多くの人に支えられていた事を感じていたという。

縁談の話もあったが、中尾エイ先生が間に入り助言をしてくれていた。「お金だけで決めてはいけない。」と教えられたという。その後、現在の夫との縁も中尾先生が取り持ってくれた。交際中は文通をしていた。

子供の家を退職後は夫と一緒に東京や大阪の町で暮らした。

○中尾先生、坂田先生の印象

中尾先生は一見厳しそうだが、穏やかで母のような存在だった。怒られた記憶はないという。一方で礼儀には厳しく、畳の縁を踏まないことや掃除の仕方、ふすまの開け方などを丁寧に教えられた。

坂田先生は父のような存在で、「偏った愛情では無く、平等に愛情を注ぐことが大切だ。」と日々話していた。

夫は 12 年前に亡くなった。新聞社に長く勤め、スポーツが好きな人だった。「やり残したことは何もない。」と語っていたことが印象に残っている。

アルバムを眺めながら、「こんな時代もあったんだね。」と静かに振り返った。

そしてこう語った。
「子どもは大事にしてあげないといけない。将来があるからね。」

第２章　大村子供の家創設

終戦後の日本には、多くの引揚孤児がいました。ＧＨＱの指示によって 1948 年に行われた全国調査では、1 万人を超える引揚孤児が確認されています。現在では、実際にはさらに多くの子ども達が存在していた可能性も指摘されています。

それらの引揚孤児の多くは、博多港や浦頭港から日本へ上陸したと考えられています。

戦後の厳しい困窮と食糧不足の中、多くの子ども達は不安とわずかな希望を胸に日本へ引き揚げてきました。その子ども達に深く心を寄せた人物が、後に大村子供の家を創設する坂田眞瑛でした。

眞瑛は当時、恩賜財団同胞援護会の長崎県支部常務理事として引揚者の受け入れに携わっていました。港では、男性に酒やたばこを、女性や子どもには食べ物や飲み物を支給し、故郷へ戻った人々を迎えていました。

その中で、眞瑛が特に心を寄せたのが、家族を失った引揚孤児たちでした。

眞瑛は後年のインタビューの中で、引揚孤児たちのまなざしに強く心を動かされた事を話しています。

「終戦後、帰る場所のない子ども達の目。実に眩しかった。

幼いころ私の目もあんなだったのだろうかと脳裏から離れなかった。

多くを決意する事はなかった。ただ、この子ども達に全力を尽くすだけだ。」



眞瑛自身も 7 歳の時に家族と離れ、お寺で育てられた経験がありました。引揚孤児たちの姿に、自らの幼少期を重ねていたのかもしれません。

やがて眞瑛は、大村に残されていた旧日本軍の建物の一部を利用し、引揚孤児たちを一時的に預かる活動を始めました。

この活動こそが、現在の児童養護施設大村子供の家の原点となりました。



○恩賜財団同胞援護会とは

1946（昭和 21）年に設立された戦後日本最大級の福祉団体。戦前から存在した恩賜財団軍人援護会、恩賜財団戦災援護会の 2 つを統合して発足した。設立の目的は敗戦直後の混乱の中で苦しむ人々を救済する事でした。「恩賜」とは、天皇から下賜された資金・援助によって設立された財団という意味です。
具体的な活動内容として、以下活動を行っています。

①引揚者支援
（一時宿泊、食料支給、衣類支給、就職相談、定住支援）
②戦災者支援
（仮設住宅、宿泊所、生活物資の提供）
③孤児・児童保護
（両親を失った子ども、引揚孤児、戦災孤児の保護）
④母子家庭支援
（母子寮、保育所、生活支援の整備）
⑤医療・生活相談
（栄養失調、結核、感染症への対応）

坂田眞瑛



1895 年（明治 28 年）4 月 20 日、佐賀市神野町において 4 人兄弟の末子として坂田九州雄（さかたくすお）が誕生した。

坂田家は旧鍋島藩に仕える家柄であったが、明治維新後の社会変動の影響を受け、生活は次第に厳しさを増して行った。

九州雄は生後まもなく母親を亡くし、養子縁組で武富家に預けられる。3 歳の時に武富家と離縁し坂田家に復籍となるが、父親一人で 4 人の子どもの養育は難しく、幼少期から不安定な環境の中で育った。7 歳の時に佐賀県有田町の平瀬山龍泉寺に預けられる。龍泉寺に預けられる事となった要因は不明。父親である武範はその後満州へと出稼ぎに出掛け、九州雄が 17 歳の時に亡くなっている。

このような生い立ちから、眞瑛は「立派な人間になって父親を見返したい。」という強い想いを持つことになる。

龍泉寺に預けられた九州雄はお寺の小僧として修業に勤しむ。経読みのため檀家を回りながら学業にも励み、困難な環境においても向上心を失う事はなかった。後にこの頃を振り返って「坊主時代の修行はきつかった。」と語っている。師僧は龍泉寺 19 代宜舜。兄弟子には龍泉寺の 20 代目となる泰明がいる。

九州雄が 19 歳の時に泰明が龍泉寺の跡継ぎとなる。その後、九州雄が 23 歳の時に師である宜舜がお隠れになる。そのことをきっかけに九州雄は学び直しを決意する。

寺同士の縁もあり、京都の東寺中学校（現在の洛南高等学校）に入学。東寺に下宿し学問を探求する。さらに真言宗京都大学（現在の種智院大学）に進学し仏教の教えと学問の研鑽に努めた。大学では弁論部に所属し、社会に対する広い視野と実践的な思考力を養った。

28 歳で真言宗京都大学を卒業すると、お寺で加行に身を投じ出家得度を得て坂田眞瑛に改名するが、その志は人々の生活に寄り添い社会に貢献する事にあった。

眞瑛は晩年「経を覚えるのは性に合わなかった。」と語っているが、約 23 年もの月日を仏教にささげた眞瑛の根幹には、強く感謝の念が刻まれており、その後も龍泉寺や種智院大学との交流を続けた記録が残されている。



2025　龍泉寺

龍泉寺の 22 代住職の秀知乗さんに取材。
眞瑛の小僧時代の生活を考察。眞瑛が晩年まで龍泉寺とのつながりを大切にしていた事がわかった。
知乗さんから見た眞瑛は「小柄だがどっしりして威厳のある人物」という印象。



2025　東寺

眞瑛が生活をした東寺の建物を見学。
残存している眞瑛の写真と東寺の景色を照らし合わせ、
当時の眞瑛の生活を追った。

2025　種智院大学

京都にある大学を訪れ取材。
眞瑛が中僧都の僧位を得るために行った修行の内容を確認。卒業後の修行の記録まで残されており、卒業後も眞瑛は種智院大学を訪れていたと推測される。
828 年に空海が創設。1999 年に向島キャンパス（現在地）に移転。眞瑛の通った当時の場所は現在、洛南高等学校がある。



30 歳となる 1925 年（大正 14 年）長崎県の民力涵養事務で入庁し、地域社会の発展と住民生活の向上に尽力する。第一次世界大戦後の社会的変動の中で、国民の生活の再建と安定した国家発展を目指し、地域住民の生産力の向上や生活の改善のために尽力した。県職員として勤務する中で、地域に根差した実践活動を通じ、福祉の基盤作りにかかわる経験を積んでいった。

1945 年（昭和 20 年）長崎に原子爆弾が投下され、自らも被爆するという未曽有の惨禍に直面する。戦後の混乱と困窮が広がる中、1946 年には恩賜財団長崎県同胞援護会において中心的役割を担い、災害被災者、原爆被災者、さらには海外からの引揚者に対する支援活動に身を投じた。物資の不足や社会基盤の崩壊という困難な状況の中で、生活必需品の供給、職業訓練の実施、就労機会の創出など、多岐にわたる施策を推進し、多くの人々の再出発を支えた。県内各地に授産施設や共同作業所を設置し、ワラ工品や下駄、畳などのものづくりを通じて生活困窮者の自立を促した取り組みは、当時として先駆的なものであった。さらに児童福祉の分野においても尽力し、児童福祉法の施行後は保育所や母子寮の整備にも関わり、子ども達が安心して成長できる環境づくりに貢献した。加えて、原爆被災者の為の救護施設や生活相談所の開設にも尽力し、地域における包括的な福祉体制の構築に寄与した。



1960 年頃　子供の家での写真（右が坂田眞瑛）

これらの活動はやがて社会福祉法人としての組織化へと発展し、持続的かつ安定した福祉事業の基盤が築かれていく。坂田はその中心的存在として指導力を発揮し、「大村子供の家」の施設長、理事長として長年にわたり運営に携わった。子どもたちに対しては常に暖かく接し、自らの生い立ちを語りながら励まし導いた姿は多くの関係者に深い感銘を与えた。その姿勢は単なる保護にとどまらず、一人ひとりの尊厳と可能性を信じるものであった。

さらに、長崎県における児童福祉および障害者福祉の発展にも尽力し、各種団体の設立や運営に関わるなど、地域福祉の充実に広く貢献した。その先見性と実行力は、多くの人材を育て、今日に続く福祉の礎を築いたものとして高く評価されている。

これらの功績により、調停委員の功により最高裁判所長官表彰、同じく調停委員の功労により藍綬褒賞など、数々の栄誉が授与された。いずれも長年にわたり社会的困窮者に寄り添い続けた実践の積み重ねに対する評価である。

1986 年（昭和 61 年）11 月 1 日、92 歳で永眠。その生涯は、幾多の困難を乗り越えながらも常に人々とともに歩み続けたものであった。坂田眞瑛の志と実践は、今日の地域福祉の礎として受け継がれている。我々もその意思を胸に刻み、引き継いでいきたい。



坂田眞瑛の像

中尾エイ



1895 年（明治 28 年）1 月 18 日、諫早市仲沖名において三人姉妹の長女として中尾エイが誕生した。父・中尾良太は佐賀好生館で医学を学び、江戸ではシーボルトの愛弟子である伊東玄朴に師事した後、郷里で医院を開業した医師であった。また、西南戦争では一等軍医として従軍し、多くの負傷兵の治療にあたった人物である。母は砲術家・藤原作平の娘であり、書道や茶道、琴など多くの教養を身につけていた。エイはこのような教養と奉仕の精神にあふれた家庭環境の中で育った。

1909 年（明治 42 年）4 月、長崎県諫早高等女学校に入学。1914 年（大正 3 年）3 月、同校第一回卒業生として卒業した。同時に同窓会長に推され、その後三十年以上にわたりその任を務めるなど、地域社会において女性教育の発展にも尽力した。

1928 年（昭和 3 年）、長崎県で方面委員制度が導入されると、その第一期生として方面委員に任命される。当時の方面委員制度は現在の民生委員・児童委員制度の前身にあたるものであり、中尾エイはその草創期から地域福祉の基盤づくりに携わった。農繁期託児所主任も兼務しながら、地域の困窮家庭や子どもたちの支援に尽力し、1939 年（昭和 14 年）からは軍人遺家族指導員として、戦争によって苦境に立たされた家族の支援活動にも従事した。

戦後間もない 1947 年（昭和 22 年）、恩賜財団同胞援護会長崎県支部大村事業所長に就任。戦争未亡人への授産事業、引揚孤児の養護、地域幼児の保育事業など、戦後復興期における福祉活動の第一線に立った。大病を患い身体が不調であったにも関わらず、戦災によって傷ついた子どもたちの姿を見て「このまま見過ごすことはできない」と決意し、児童福祉の道へ身を投じた。

その後、大村事業所は「養護施設 大村子供の家」として運営されるようになり、中尾エイは施設長、施設長代理として長年にわたり子どもたちを支え続けた。当時は深刻な食糧難の時代であり、自ら農家へ出向いてかぼちゃやさつまいもを買い集め、時には実家の品物まで持ち出して子どもたちの生活を守った。また、日本各地の市町村へ手紙を書き、引揚児童の親族探しにも奔走した。さらに、自身の給与から学費を捻出して高校進学を支援するなど、子どもたち一人ひとりの未来を真剣に考え続けた。

中尾エイは、親の愛情に恵まれない多くの子どもたちにとって「慈母」のような存在であり、生涯で 800 人にもおよぶ子どもたちを育てたとされる。その献身的な姿勢は、多くの卒園生や関係者の心に深く刻まれている。社会福祉への長年の功績により、県知事表彰、厚生大臣表彰、勲六等瑞宝章など数々の表彰を受けた。

1986 年（昭和 61 年）1 月 31 日、92 歳で永眠。その生涯は、戦争や混乱の時代の中にあっても、常に弱い立場に置かれた人々に寄り添い続けた人生であった。中尾エイの残した志と実践は、今日の大村子供の家へと受け継がれている。



昭和 30 年頃　鯉のぼりを立てる様子



昭和 50 年頃　中央が中尾エイ



松本　厚生

1942 年生まれ　取材時 84 歳

初代理事長の坂田眞瑛の息子。18 歳の時に松本家の養子となり松本厚生となる。

1968 年（昭和 43 年）から現在まで 60 年間大村子供の家に勤める。1980 年から施設長兼理事長となる。現在も理事長として大村子供の家を見守り続けている。

取材者：加藤葉子、髙野知成

2026 年 7 月 7 日　大村子供の家会議室にて

○大村子供の家に務めるまで

1942（昭和 17）年、坂田（松本）厚生は坂田眞瑛・カヤコ夫妻の 5 人兄弟の末子として長崎市桶屋町に生まれた。

太平洋戦争のさなか、生後間もなく母方の親族を頼って溝陸町へ疎開。兄と共に暮らし、姉は眞瑛ゆかりの地である龍泉寺へ疎開したため、家族は離ればなれとなったまま終戦を迎えた。一家が再び共に暮らし始めたのは、厚生が 5、6 歳の頃であった。

当時、父・眞瑛は戦災者や引揚者の支援に奔走しており、家を空ける日々が続いていた。そのため、子育ては主に母・カヤコが担い、厚生は「父に怒られた記憶がない。」と振り返る。

7 歳の時、敗血症を患い、国立病院（現・長崎医療センター）へ入院した。眞瑛は蓄えていた貯金を治療費に充て、厚生は一命をとりとめる事が出来た。しかし、同じ病室で過ごした子ども達の多くは命を落とした。この出来事は厚生の心に深く刻まれ、その後、施設で暮らす子ども達へ命の尊さを伝える際に、たびたび語られる経験となった。

13 歳の時、眞瑛は大村子供の家の施設長に就任し、父と過ごす時間は以前より増えた。しかし、当時の厚生は、父がどのような想いで仕事に向き合っているのかを十分に理解していたわけではなかった。

むしろ、家庭よりも大村子供の家を優先しているように映る父の姿に、寂しさを感じる事もあったと言う。

18 歳の時、母方の松本家の跡継ぎ問題をきっかけに、姉・明美と共に母の妹・フジ子の養子となり、「坂田厚生」から「松本厚生」となった。その後、法政大学法学部へ進学する。

大学進学に特別な目的があったわけではない。父が歩んだ福祉の道とは異なる世界で、自分自身の進む道を見つけたいという想いがあった。卒業後は日通商事（現・ＮＸ商事）へ就職し、営業職として社会人生活をスタートさせる。

日通商事は当時創立間もない会社で、営業職として働き、企業人として日々を送る。当時の同僚には、後に『ずっこけ三人組』シリーズで知られる児童文学作家・那須正幹氏もいた。

○大村子供の家との出会い

25 歳の時に退職。父・眞瑛から「大村子供の家に加勢してくれ。」と声を掛けられる。その言葉をきっかけに大村へ戻り、1968（昭和 43）年、大村子供の家に入職した。この決断が、その後 60 年にわたり子ども達と歩み続ける人生の出発点となった。



1968 年当時の子供の家

当時、子ども達は、旧日本軍が使用していたベッドで生活し、入所児童の多くは幼児だった。球技大会や本経寺への寺参りなど、現在まで受け継がれている行事もすでに始まっていた。

入職後まもなく、低学年棟や女子棟、体育館が整備される。体育館は、眞瑛が戦前に務めていた開成学園の体育館を参考に設計されたもので、子ども達が思い切り体を動かせる場所となった。

正月やお盆には職員が子ども達を自宅に招き、春は遠足、夏はキャンプや野球、バレーボール、棟別登山、ラジオ体操、運動会など、年間をとして多くの行事が行われていた。

一方で、職員の勤務環境は決して恵まれていたとは言えず、12 時間を超える勤務も珍しくなかった。

当時を振り返り、厚生はこう語る。

「良い仕事とは思えなかった。条件だけをみたら、大村子供の家よりも良い仕事は一杯あった。ただ、目の前で悩みを抱えている子どもと向き合う事に一生懸命で、他の事を考える事はなかった。」

当時は、児童養護施設に暮らす子どもが偏見の目で見られる事も少なくなく、自らの生い立ちを隠して生活する子どもも多かった。

そうした現実に触れる中で、厚生は父・眞瑛が歩んできた道の重みを少しずつ理解していく。

そして、「施設で育ったことを恥じるのではなく、胸を張って『大村子供の家で育ちました。』と言える子どもを育てたい。」という想いが、厚生の養育の原点となっていった。

○大村子供の家の建て替え

子ども達と生活を重ねる中で、「より良い環境で育って欲しい」という想いは年々強

くなっていった。

1972（昭和 47）年、30 歳の時に社会福祉調査会の海外研修へ参加し、ヨーロッパ 7 か国を 1 か月かけて視察した。

そこで目にした児童福祉施設は、日本とは比べものにならない程充実した環境が整えられていた。

「今の子供の家の建物で十分な支援が出来ない。」

その思いは帰国後すぐに行動としてつながる。

1980（昭和 55）年に施設長へ就任すると、本体施設の建て替えに着手。1983（昭和 58）年には、80 人定員を 4 ホームに分けた中舎制の新施設が完成し、子ども達の生活環境は大きく改善された。



1983 年当時の子供の家

厚生はその後も 2 度、海外研修に参加し、児童福祉先進国の取り組みから多くを学び続けた。

「子ども達も、誰もしていないような体験をして欲しい。海外に連れて行くことのできる機会があるなら、どんどん連れて行ってあげて欲しい。一般家庭では経験できない思い出を積み重ねていくことが、施設で育つ子ども達の自信につながる。」

その視点は、施設の中だけにとどまらなかった。

1995（平成 7）年には全国で 4 番目、九州では初となる児童家庭支援センターを設立。児童相談所へ相談する事への心理的・地理的な負担を少しでも減らし、地域の子育て家庭を支える仕組みづくりに取り組んだ。

「県央児童家庭支援センター　Rapport」という名称には、長崎県の中央に位置する施設として、地域に寄り添い続けたいという願いが込められている。

厚生は、大村子供の家を「子どもを養育する施設」だけではなく、「地域全体で子どもを支える拠点」へと発展させていった。

○受け継がれる想い

施設の充実と地域支援に取り組む一方で、厚生は常に子ども達との生活を何よりも大切にしてきた。

地域小規模養護施設の設置を始め、社会の変化や制度改正に合わせながら、大村子供の家の役割を見つめ直し、養育の在り方を更新し続けた。

また、長崎県児童養護施設協議会の会長職を 10 年、全国児童養護施設協議会の副会

長を 1 期務めるなど、長崎県のみならず全国の児童福祉の発展にも尽力した。

現在は施設長を息子・幸治に引継ぎ、理事長として大村子供の家を見守り続けている。

60 年にわたり子ども達と向き合ってきた厚生には、今も変わらない願いがある。

「大村子供の家が、卒園した後も実家のように帰って来る事が出来る安心の場であって欲しい。」

卒園後、困った時、苦しい時、だれにも頼れなくなった時。

「いつでも帰って来ていい。」

その言葉は、卒園する子ども達一人ひとりへ、今も変わる事なく伝え続けている。

そして、職員にも、繰り返し語り続けて来た言葉がある。

「とにかく子どもと一緒に生活しなさい。子供の家のスローガンは、ニコニコ・ペチャクチャ・ドタバタ・ベタベタ。職員も一緒になって遊びなさい。」

子どもと生活を共にし、笑い、悩み、成長を喜ぶ。

その積み重ねこそが、子ども達の安心につながる。

坂田眞瑛が引揚孤児へ向けたまなざしは、松本厚生へ、そして現在の大村子供の家へと受け継がれている。





～あの頃を振り返って～

松川（長里）寿美子

1930 年生まれ　取材時 95 歳

1948 年（昭和 23 年）から 1977 年（昭和 52 年）まで 27 年間大村子供の家に勤務。戦後の混乱期において、子どもたちの暮らしを支え続けた。

取材者：松本幸治、加藤葉子、髙野知成

2025 年 10 月 10 日　松川先生宅にて

「家にあったアルバムを用意しましたけど、見てもあまり人の名前は出て来んねえ。」

そう静かに語る松川先生の前には、大切に保管されてきたアルバムが置かれていた。取材のためにあらかじめ写真を見てくださっていた。

「子どもの家にいる時は、いろんな所に旅行に行ったとよ。坂田先生が『それが息抜きだ』って言ってね。」

その最初の言葉は、大村子供の家初代理事長坂田眞瑛への感謝であった。

松川先生はアルバムをめくりながら、一つ一つの思い出をかみしめるように振り返った。

○戦争の記憶と坂田眞瑛との出会い

松川先生が終戦を迎えたのは１５歳の時。大阪でのことであった。

本当は進学し、教師になることを夢見ていた。しかし戦争は、その道を断ち切った。

1944 年、担任教師の進めで郵便局へ就職。慣れない土地・大阪で忙しい日々を送る中、戦況は悪化していく。

1945 年 3 月、大阪大空襲。

勤務中。窓の外に広がっていたのは、見慣れた町が破壊されていく光景だった。

機銃掃射、爆撃、そして吹き飛ばされる命。

唖然と立ち尽くす松川先生を、局長が防空壕へ引き込んだ。

震えは止まらなかった。生きた心地がしなかった。

やがて爆撃がやみ、振り出した雨。

その時の事を、松川先生ははっきりと覚えている。

「黒い雨が降ったとよ。あれは忘れられない。」

終戦後、満州に出征した兄の死を知る。遺骨は灰となっていた。

「戦争は嫌だ。大嫌い。」

80 年の時を経ても、その言葉は重く、深く胸に響く。

その後、大阪へ移り、病院事務として働くが、血が苦手だったため長くは続かなかった。

○子どもたちとの出会い

次に働いたのは、原口町の授産施設。ミシン仕事の手伝いであった。
未亡人の女性たちとともに、黙々と作業を続ける日々。

そんなある日、建物の外から聞こえる下駄の音に気付く。

当時はまだ知らなかった。同じ建物で、引揚孤児の養護が行われていた事を。



1950 年大村子供の家　本体施設

しばらくして坂田眞瑛と出会う。
「人手が足りんとよ。手伝ってくれんね。」
その一言で、松川先生の人生は大きく動き出した。

○大村子供の家での暮らし

保母として働き始めた松川先生は、幼児棟を担当する事になる。

当時、保母はわずか 4 人。約 80 人の子どものうち、半数近くが幼児であった。
決して恵まれた環境ではなかった。

物も食べ物も不足し、布団は風呂場で洗う。



1960 年代　幼児棟にて子どもが遊ぶ様子

昼寝中に不審者が入り込むこともあった。
それでも、子ども達と過ごす時間には確かなぬくもりがあった。

「よう野球もしよったよ。『先生はキャッチャーして』ってね。」

笑顔で語るその記憶は、今も色褪せない。

当時の子ども達とのつながりは、今も続く。「姉さん」と慕って来る卒園生。手紙や電話、贈り物などのやりとりがある。

順風満帆な人生ばかりではなかった。
その一つ一つに向き合い続けた日々があった。



1952 年　幼児棟完成

○子供の家への想い

「生きていれば楽しい事もあれば悲しい事もある。私は周りの職員に恵まれたから。」

そう語る松川先生の表情は、穏やかだ。

坂田眞瑛は厳しくも筋の通った人物だったという。
「怒る時も感情的やなかった。『大きな声で怒らんとよ』って。
また、中尾先生からは、子どもへの向き合い方を学んだ。

共通していたのは、子どもへの深い愛情だった。

戦後の混乱期、その中で大村子供の家を支えていたのは、静かで揺るぎない献身であった。

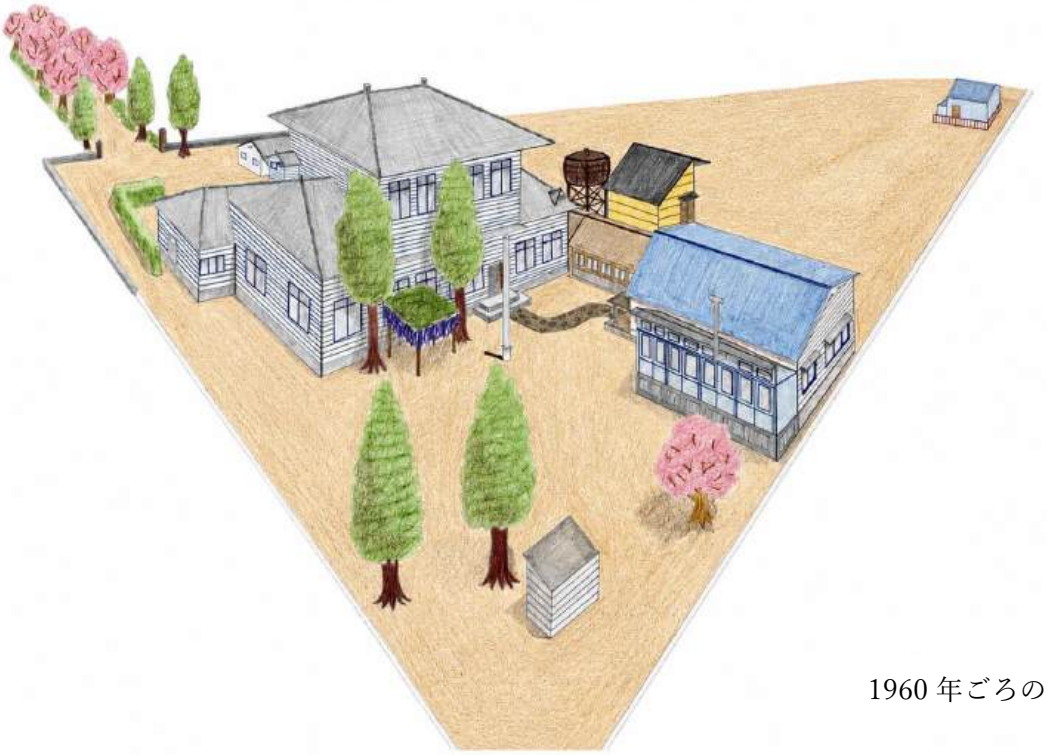
子どもたちの未来のために、人生をささげた一人の女性の記憶は、これからも語り継がれていく。



2025 年取材　中央が松川先生

第 3 章　大村子供の家の変遷

全体マップ



1960 年ごろの子供の家



①旧本体施設（～1983）

日本軍およびその家族の保養施設として活用されていた建物。

戦後は授産施設として衣服の製造（～1950）や、引揚孤児らの入居施設として最大 135 人が生活した。

1948 年に認可がおり児童養護施設となる。

1983 年に建て替えられるまで、数多の子どもらの生活の場となった。



玄関から風呂場へ続く廊下

事務室





調理場

裏の勝手口からは職員棟や作業棟に出る事が出来た。



②幼児棟

1954 年に完成。写真にあるガラス張りの部屋は後に増設している。

主に幼児が生活をしていた。

増設された部屋では、体育館が完成するまでは対外行事などでも使用された。



幼児棟内で遊ぶ児童



③職員棟

1983 年に取り壊されるまで、職員らが暮らした。

左写真はグラウンド側から撮影。



本体施設側からの写真

④作業棟
散髪などに利用されていた建物。

本体施設建て替えの際に取り壊しとなった。





作業棟の裏の渡り廊下
庭側からの写真



1950 年ごろ
作業棟前で野球をする子ども達。



1980 年ごろの子供の家



⑤低学年棟（第 2 幼児棟）

1968 年に完成。低学年の児童が生活をしていた。



本体施設建て替え後の低学年棟

⑥女子棟

1968 年に完成。女子が生活していた。

本体施設の建て替えの際は、調理員が寝泊まりをしていた。





⑦体育館

1969 年に完成。現在も使用されている。

本体施設建て替えの際は男子が生活をしていた。

1984 年に拡張工事が行われている。



本体施設建て替え前のグラウンドからの風景



2000 年ごろの子供の家



⑧新本体施設（1984～現在）

中舎制での養育を目指し、本体施設の建て替えが行われた。建設時には男子棟、管理棟、女子棟の 3 棟が繋がっていたが、2025 年に女子棟の取り壊しが行われ、新たに多機能型児童家庭支援センターが建設された。

同時に、ミーティングルームの外にあったスペースに造園を行い、子ども達のやすらぎのスペースとなった。





⑨児童家庭支援センター（旧）（1995 年～現在）

地域交流スペースとして建設され、様々な用途で活用された。地域からの要望も多く、1998 年からは児童家庭支援センターとして活用。2025 年に多機能型児童家庭支援センターが建設されるまで運営が行われた。現在は b&g プラスや nico ステップとして活用されている。



2026 年現在の子供の家



⑩多機能型児童家庭支援センター（2026~）

児童家庭支援エンターや一時保護、カフェスペースなどで利用されている。





カフェ　「えんくる」

多機能型児童家庭支援センターの1階にあるカフェスペース。中高生を中心に誰でも利用が可能。

メッセージ

「どんな時も生まれてくる子供たちが希望なのよ」

この度は、ゲストにお招きいただき、本当にありがとうございます。

私が中国東北部に生まれ、葫蘆島から遠州丸に乗って佐世保港にたどり着いた日から、今年の 10 月で 80 年です。

9 月の今頃は、まだ無蓋貨車で旅をしていたでしょう。

2 歳だった私が今 82 歳、記憶はないはずなのに、無性に何もかもが恋しいです。

この数年、世界に戦争の嵐が吹き荒れて、たくさんの子どもたちが、戦火に怯え、住む場所を奪われ、絶望に追い込まれています。

「どんな時も生まれてくる子供たちが希望なのよ」

そう言ってくれた母の言葉を、そのまま彼らに届けたいです。

こんな時代を一刻も早く終わらせなければならない！その思いをみなさんと語り合い、歌いたいと思います。

戦後 80 年の歴史を見届けてきたことの大切さを、今ほど感じることはありません。

大村子供の家で綴られたはずの歳月と、私自身の生まれた日からの旅は、どこかでしっかりと手を繋いでいます。これからもきっと。



シンガーソングライター
加藤　登紀子

満州ハルピン生まれ。
2 歳の時に終戦。翌年に引き揚げ、浦頭港（佐世保）より上陸している。

祝辞

大村子供の家が創立 80 周年を迎えられましたことを心からお喜び申し上げます。

また、長年にわたり子どもたちの健やかな成長を支え、地域に根差した児童福祉の推進に多大なるご尽力をいただいております、松本厚生理事長をはじめ職員の皆様方に深く敬意を表します。

貴施設は、終戦直後の混乱期に、海外からの引揚者のうち親類縁者のいない子どもたちを受け入れ、養護することからその歩みを始められました。以来、児童養護施設としての役割はもとより、児童家庭支援センターの運営を通じ、地域の児童家庭相談・支援の拠点としても重要な役割を果たされております。

また、国が進める「社会的養護は家庭的な養育環境の形態へ」という方針に的確に対応し、これまでに地域小規模児童養護施設、小規模グループケア及び分煙型小規模グループケアを開設され、近年では、小規模保育園の開園を皮切りに、放課後児童クラブ、認定こども園の開園など、時代のニーズを捉えた事業の実施に積極的に取り組まれております。

昭和から平成、令和へと歩んでこられた道のりは決して平坦なものではなかったと拝察いたしますが、これまでに積み重ねた歴史は、地域社会にとってかけがえのない財産です。

これからも、子どもたちが自分らしく、安心して過ごすことのできる温かな居場所として、また、地域と家庭とをつなぐ架け橋として、一層発展されますことを期待しております。

結びに、大村子供の家の皆様方のご健勝とご活躍を心から祈念いたしまして、お祝いの言葉とさせていただきます。



大村市長
園田　裕史

祝辞

社会福祉法人大村子供の家の創立８０周年を心からお慶び申し上げます。

この記念すべき節目に際し、理事長をはじめ職員の皆様、これまで施設運営を支えてこられた全ての皆様のご尽力に心から感謝申し上げます。併せて、昭和２１年の創立以来、８０年という長きにわたり、本県の児童福祉と地域社会を温かく支えてこられたことに、深く敬意を表します。

現在、こどもや家庭を取り巻く環境は複雑化・多様化しており、令和６年４月に施行された改正児童福祉法のもと、地域社会全体でこどもと家庭を切れ目なく支える体制の構築が強く求められております。

このような中、大村子供の家におかれましては、「地域に根ざした児童福祉」の理念のもと、質の高い養育の実践とともに、時代のニーズに応じた事業を展開してこられました。特に、県央地域のこどもや家庭への相談支援等を担っている県央児童家庭支援センターRapport（ラポール）は、令和８年４月から、従来のきめ細かな相談支援に加え、一時保護・ショートステイ等に対応できる宿泊施設や、こどもが安心して気軽にくつろげる居場所を開設されるなど、地域社会への貢献活動に積極的に取り組まれております。

今後とも、こどもたちが笑顔で健やかに成長できるよう、地域に不可欠な拠点として更なる発展を遂げられますことを期待しております。

結びに、大村子供の家の職員の皆様ならびに関係皆様のご健勝とご多幸を心から祈念いたしまして、お祝いの言葉とさせていただきます。



長崎県福祉保健部こども政策局長
峰松　茂泰

旧職員より

大村子供の家で過ごした日々を振り返ると、たくさんの思い出が蘇ります。

私は約 13 年間、男の子たちと生活を共にし、毎日の生活や行事の中でさまざまな経験をさせてもらいました。もちろん、子どもたちとの関わりの中では、思うようにいかないことやトラブルも多々あり、どうすればいいのか悩んだり、自分の関わり方に迷ったりすることもありました。それでも、子どもたちと向き合い、一緒に悩み、考えながら過ごした時間は、今振り返ると私自身を大きく成長させてくれた大切な時間だったと感じています。

そこで学んだことや経験は、自分自身の子育てにも、現在勤めている支援センターや児童館でも、たくさん活かされています。

子どもたちだけでなく、悩んだ時に支えてくださった職員の皆さんにも感謝の気持ちでいっぱいです。今でもたまに会って、当時の懐かしい話しで盛り上がることもあります。

大村子供の家で働くことができて、本当に良かったと思っています。

平成から令和へ時代が変わり、子育ても子どもたちを取り巻く環境も変化して大変なことも多いと思いますが、これからも子どもたちの笑顔を大切にしながら、温かい「子供の家」であり続けることを願っています。



大村子供の家旧職員　峯野　綾子　（旧姓　野副）
平成 5（1993）年入職
平成 18（2006）年退職

卒園生より

設立 80 周年、誠におめでとうございます。

私は五島市福江で生まれ、6 歳まで東京で過ごしたあと、再び五島へ戻りました。

小学 2 年生の時、家族を支えていた父が脳出血で倒れました。そして、そのわずか一週間後に妹が生まれました。

父は漫画家として仕事をしており、それまでの生活は比較的裕福でした。しかし、家や車を購入していた事もあり、貯蓄はほとんどなく、父が倒れた事で家庭は約 2.000 万円の借金を抱える事になりました。

専業主婦だった母は、幼い子ども 3 人を育てながら家計を支える毎日でした。突然何も買ってもらえなくなった現実を、当時の私は受け入れる事が出来ませんでした。見栄を張るようになり、学校では嘘ばかりつく子どもになってしまいました。

中学に入ると、その性格が原因で周囲から距離を置かれ、不登校になりました。家に帰っても、生活に追われる母や祖父との関係は苦しく、精神的にも追い詰められていきました。

そんな時、母が児童相談所へ相談し、大村子供の家で生活する事になりました。半年以上学校へ通えていなかったため、桜が原中学校での成績はほぼ最下位でした。このままでは将来がないという危機感から、当時の松本厚生施設長に相談し、塾へ通わせていただきました。後になって、そのことがきっかけとなり、一部の子ども達も塾へ通えることになったと伺いました。

また、大村子供の家で出会った仲間たちは、自分の生い立ちを隠す必要がない程、それぞれ複雑な環境で育っていました。そして私の虚言癖についても、「それは良くない。」と率直に伝えてくれました。その環境で育った事が、自分自身の性格や考え方を見つめ直す大きなきっかけになりました。

高校進学を機に、「嫌われたままの地元で終わりたくない」という思いから、五島へ戻り、その後、母の支えもあり東京の駒澤大学へ進学しました。この進学は、大村子供の家で勉強する環境を整えていただき、公文や塾に通わせていただいたからこそ実現できたものだと思います。

20 代は借金を抱え、定職にもなかなかつけず苦労しましたが、30 代で一念発起し、ＩＴ人材サービスの会社を立ち上げました。現在は創業 6 期目となり、多くの社員に支えられながら事業を続けています。また、会社を経営する傍ら、明治大学大学院で経営学（ＭＢＡ）を学び、経営者としての基礎力を磨きました。こうして新たな挑戦を続ける事ができているのも、大村子供の家で学ぶ環境を与えていただき、自分自身と向き合う機会をいただいたからこそだと感じています。

私にとって大村子供の家は、「性格を見つめ直すきっかけを与えてくれた場所」「勉強する環境を用意してくれた場所」そして「高校から帰る場所があり、その選択を後押ししてくれた場所」です。

あの頃の経験がなければ、今の私はありません。大村子供の家で過ごした日々が、私の人生の基礎を作ってくださりました。心から感謝しています。

これからも、一人でも多くの子ども達にとって、大村子供の家が人生の支えとなる場所であり続ける事を願っています。



青山　裕太
平成 15（2003）年入所
平成 17（2005）年 3 月卒園

80 周年を迎えて

大村子供の家が皆様方からのご支援により創立 80 周年を迎える事を大変光栄に思うとともに感謝申し上げます。

大村子供の家は恩賜財団同胞援護会（総裁高松宮宜仁親王、会長徳川家正公爵）長崎県支部（支部長杉山宗次郎県知事）が昭和 21 年 4 月 1 日、戦災者、引揚者、原爆被爆者等々への政府が行う援護事業の補完協力を使命として発足し、昭和 21 年 9 月 21 日より、いわゆる引揚孤児達を、すでに戦争未亡人たちの洋裁共同作業所としていた建物内で養護育成したのが始まりです。

その後、幾多の変遷を経て、児童養護施設だけでなく、地域交流スペース、県央児童家庭支援センター、心理療法実施指定承認、分園型小規模グループホーム、ファミリーホーム事業（現在事業変更）、小規模保育園、家庭でも学校でもない児童の第三の居場所として児童保育園、認定保育園、放課後等デイサービス、だれでも通園制度指定承認等々、地域に根差した児童福祉に対応してゆく努力をしています。

「日本の未来を託する子ども」を育てていくために、今後も児童福祉に貢献していきます。

「子どもは国の宝！」を社会全体に「子育ては楽しく素晴らしいもの」と認識して 1 人の児童も取りこぼすことなく、励まし支えていってほしいです。我々も支援します。

大村子供の家も地域に根差した児童福祉にします。

大村子供の家　理事長
松本　厚生

80 周年を迎えて

大村子供の家創設 80 周年を皆様と共に迎えることができた喜びは、私の拙い文章では纏めきれないほど大きく、また特別なものであります。これまで大村子供の家を支えてくださった皆様や先人達に改めて御礼申し上げます。

私自身、大村子供の家に入職したのは 10 年ほど前、70 周年記念式典の開催準備が私に課せられた最初の大仕事でした。当時の私は大村子供の家が持つ歴史の「重み」や「価値」を十分認識するに至らず、地域の方々や先人達の想いを十分に反映できなかったという反省がありました。10 年間という時を経て、様々な人に出会い、その重みや価値に気づかされたところです。今はそれらを後世にしっかりと引き継ぐべく、貴重な証言や大切な保管情報を元にこちらの記念誌にまとめた次第です。今回の記念誌や記念映像は、大村子供の家の若手職員が主力となり、歴史の勉強や、世代を超えた聞き取り調査を経て出来た賜物です。

皆様からいただく「共感」という力が、これまで大村子供の家の 80 年間を創りあげてきた気がします。創設者の坂田眞瑛が引揚孤児たちに抱いた「共感」が広がり、形を変え今の大村子供の家を創っています。蝋燭の火のように絶えず周囲を燈し、彩を変え、広がるこの「共感」の力を今後も大切にしたいと考えています。

これからも先人達のバトンを受け継ぐ責任と、未来へと繋げていく喜びを感じながら、日々業務に精進してまいります。引き続き大村子供の家をよろしくお願い申し上げます。

大村子供の家　施設長
松本　幸治

大村子供の家 80 周年実行委員

○記念誌作成
　研修委員会
　委員長　加藤葉子
　責任者　髙野知成
　　青木わかな
　協力　　松永華歩

○記念式典準備
　対外広報委員会
　責任者　松代健吾
　　伴瀬弓子

発行日　2026 年　9 月 21 日
発行者　社会福祉法人　大村子供の家
　　児童養護施設　大村子供の家
　　〒856-0811
　　長崎県大村市原口町 591 番地 2
　　電話　0957-55-8319
印刷　つじ印刷
調査協力　平瀬山　龍泉寺
　　東寺
　　種智院大学

創立 80 周年　記念食事会
　　2026 年　9 月 21 日
創立 80 周年　記念式典
　　2026 年　9 月 29 日
特別講演「私の戦後史」加藤登紀子
基調講演「満州からの佐世保引揚孤児」本庄豊
パネルディスカッション
「原点を振り返り、未来を創造する」
パネリスト
本庄豊（社会的養護歴史研究者）
田中れいか（社会的養護出身・モデル・社会運動家）
増沢高（子どもの虹情報研修センター長）
コーディネーター
松本幸治（児童養護施設 大村子供の家 施設長）

編集後記

2026 年 9 月大村子供の家は 80 周年を迎えました。

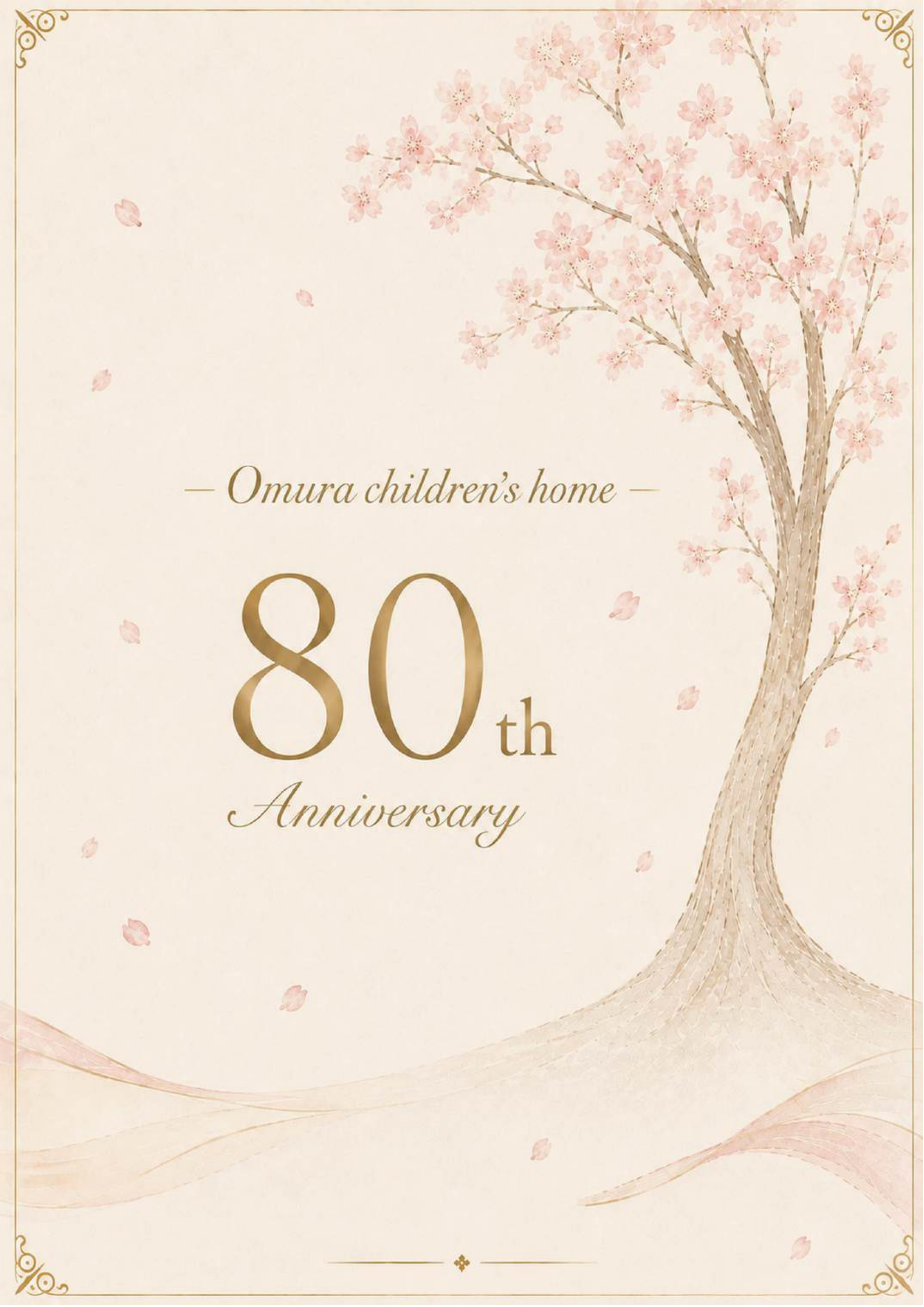
この大きな節目に向けて、私達は大村子供の家の創設の歴史、そして創設後の歩みを支えて来られた先人の先生方の想いについて、調査と考察を重ねてまいりました。

子供の家に眠っていた写真や記録の整理、初代理事長ゆかりの地を巡っての聞き取り調査、旧職員や卒園生へのインタビュー。そうして集まった一つひとつの記憶や言葉が、少しでものその時代の温度を伴って伝わるよう、この記念誌にまとめました。

この一冊を通して、これまで大村子供の家に関わって来られた方々の想いや歩みに触れ、たくさんの共感が生まれる事を願っています。

調査にご協力いただいた皆様、そして記念誌の制作にお力添えをいただいた皆様に、心より感謝を申し上げます。

編集責任者　髙野知成


— Omura children's home —
80th
Anniversary